



ごみすて場の原始人

Ｃキング作・河野一郎訳

スズキコージ画

N. D. C. 933 ごみすて場の原始人

C・キング 作

鈴木康司 絵

旺文社 1980

232p. 22cm (旺文社創作児童文学)

小学中級以上

Clive King : Stig of the Dump, 1963

(旺文社創作児童文学)

ごみすて場の原始人

1980年10月1日 初版印刷

(落丁・乱丁本はお取りかえします)
(ので本社に直接お申し出ください)

1980年10月10日 初版発行

作 C・キング

訳 河野一郎

絵 鈴木康司

発行者 立澤節朗

印刷所 日之出印刷株式会社 / 開成印刷株式会社

製本所 荒木製本株式会社

発行所 株式会社 旺 文 社

162東京都新宿区横寺町

TEL (編集) 03-266-6374
(販売) 03-266-6415

8397 694-06 0724 E

(許可なしに転載、複製
することを禁じます。)

08092

© 河野一郎・鈴木康司 1980

Printed in Japan



ごみすて場の原始人

C・キング作・河野一郎記

スズキフジ画

もくじ



- 1 地面がくずれた 8
- 2 穴掘り作業^{あなほ} 24
- 3 二度暖かくなる方法 57
- 4 おかしなキツネ狩り^が 78
- 5 三人の悪ガキたち 100





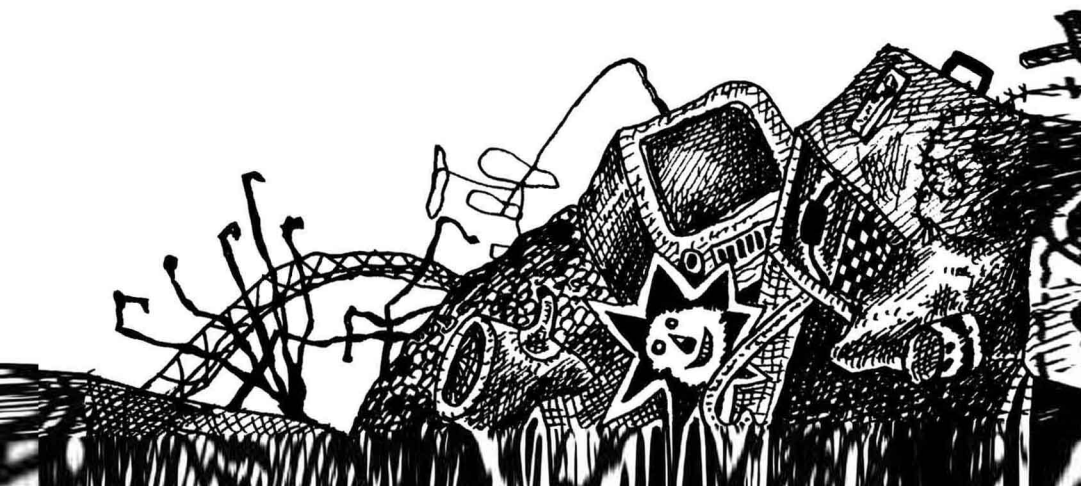
6 皮をはいでうめられて
124

7 パーティは大さわぎ
146

8 真夏の夜
178

9 ふしぎな石柱
197

あとがき
230



ごみすて場の原始人

1 地面がくずれた

白亜^{チヨーク}を掘^ほった穴^{あな}のふちにあんまり近^{ちか}寄^よると、地面がくずれますよ。バーニーは、もうさんざん言い聞かされていた。みんなからそう言われていた。泊^とまりにゆくたびに、おばあさんから。そして、姉さんときた日には、ほかにやいやい文句^{もんく}を言^いってないときはいつでも。バーニーも心のどこかで、地面がくずれるというのはほんとかもしれない、と思^{おも}っていた。でも、人から言われるのと、自分の目で見てみるのでは大違^{おちが}い。それに今日は、何もすることも遊^{あそ}ぶあてもなく、ゆくところもない、うっとうしいたいくつな日^ひだった。ゆくと思^{おも}えば、チヨーク穴^{あな}しかなかった。あのごみすて場の。

バーニーは、ぐらぐらする柵^{さく}をくぐり抜^ぬけ、穴のふちまで行^いってみた。ここはむかし、丘^{おか}にな^なってたんだ、とバーニーは思^{おも}った。おおぜいの男^{おとこ}たちがや^やって来^きて、チヨークをさんざん掘^ほ



り出し、地面にこんなでっかい穴をあけていったんだ。ずいぶんたくさん白墨^{はくぼく}ができただろうな。ずいぶんたくさん^はの学校で、ずいぶんたくさん^はの黒板に字が書けただろうな。何百年ものあいだ、掘^ほって掘^ほって掘^ほりまくったんだ。そして、とうとう掘^ほるのにあきたか、それともだれかが、もうやめとこう、あんまり掘^ほると山がなくなってしまうぞ、と言ったのだろう。ともかく、今ではこのでかい穴のしまつに困^{こま}って、もう一度埋^うめようとしていた。いらなくなった物を、みんなどんどん、穴の底めがけて投げこんでいたのだ。

バーニーは、草ぼうぼうの中をはってゆき、穴の上からのぞいてみた。穴のまわりは白いチヨーク質^{しつ}で、ところどころ火打ち石^{すじ}の筋^{はね}が、骨^{ほね}のようにのぞいて見えた。穴の上には、くずれかかった茶色の土と、ふちに生えている木の根っこが見える。根っこはふちの上で輪になり、空中でからみ合い、また土の中へはいりこんでいた。何本かの木は、ふちから乗り出すように生え、ほんの五、六本の根で、地面に必死にしがみついていた。根っこの下では、土もチヨーク質^{しつ}もすでにくずれ落ちてしまっている。いずれいつか、あの木もぜんぶ穴の底へ落ちてしまおうだろう。ひものようなツタや、《おじいさんのひげ》という名のツル草が、空中にぶらぶらしている。

ずうっと下のほうに、穴の底があった。ごみすて場だ。コケやニワトコやイラクサのあいだ

に、へんてこなガラクタが見えた。あれは船の舵輪だりりんかな？ 飛行機の尾翼びよくだろうか？ ともかく、本物の自転車が見えた。あれが手にはいったら、きっと動かせるのに。うちでは、自転車を持たせてもらえなかったからだ。

あの穴の底へおりて行けたらなあ。

そのときだった、足元の地面がくずれたのだ。

バーニーは、頭が下へ落ち、両足が上へあがつてゆくを感じた。からだの下で、土のくずれるド、ド、ドという音がした。そしてそのあとは、いっしょに落ちてゆく草を一つかみにぎったまま、まっさかさまに落ちて行った。

「地面がくずれるって、こんなふうなんだな」と、バーニーは思った。それから、どうやら空中で一回でんぐり返しをしたらしく、半分ほど落ちたところでチョーク質の岩棚いわだなにぶつかり、ツル草やツタや木の枝えだを引きちぎり、コケの生えた土手の上へ落ちた。

頭をいやというほどぶつけると、こないだの火曜の夕飯には何を食べたかな、なんてことを、7かける6はいくつだったかななんてことと、ごちゃまぜに考えたりするものだが、バーニーも、何だかおかしなことを考えはじめていた。しかたなく目をとじ、考えがごちゃごちゃしなくなるのを待った。そして、目をあけてみた。

何だか、戦争中の防空壕ぼうくうこうみたいな中にたおれていた。見上げてみると、ニワトコの枝と、とても古ぼけたじゅうたんと、錆だらけの古い鉄板でできた屋根というか、屋根の一部が見えた。大きな穴があいているところを見ると、あの穴から落ちて来たにちがいない。白いチョーク質の崖がけと、崖がけのてっぺんの木立こだちやツル草、そして雲の流れている空が見えた。

まだ死んでなかったらしい、とバーニーは思った。それほどけがをした様子もなかった。首をまわして、まわりを見てみた。白いチョークを眺めたあとなので、このほら穴の中は暗くて、いったいどんな場所なのか、わからなかった。チョーク質の岩盤がんばんに掘った穴のようにも見えたし、ほら穴の入り口に作った小屋のようにも思えた。ひんやりと、しめっぽい臭においがした。バーニーがつき破やぶって落ちた屋根から、ワラジ虫やハサミ虫がポロポロ落ちて来た。

それにしても、いったい足はどうなったのだろう？ 起き上がろうとしてみたが、だめだった。どうしても両足が動かないのだ。ひょっとすると、折れてしまったのかな、とバーニーは思った。だったとしたら、どうしよう？ 大丈夫かどうか足を見ると、崖がけにはりついているツル草で、がんじがらめになっているのがわかった。だれがぼくをしぼり上げたのだろうか？ 何とか自由にならないかと両足を蹴けって見たが、だめだった。崖がけからツル草が、何メートルもたれている。どうやら落ちたときに、ツル草にからまってしまったらしい、とバーニーは思っ

た。足がからまっていなかったら、首の骨を折っていたかもしれない。

じっと横になったまま、バーニーはもう一度、ほら穴の中を見まわしてみた。目がなれてくると、ほら穴の奥の暗いところまで見る事ができた。

そこには、だれかがいたのだ！

いや、だれかというより、あやしい何かだ！

*

人間だか物だかわからないが、そいつはもじやもじやの毛におおわれていて、キラキラ光る黒い二つの目で、じっとバーニーを見つめている。

「やあ！」と、バーニーは言った。

そいつは何も言わない。

「崖^{がけ}から落ちてしまったんだ」と、バーニーは言った。

そいつはうなり声を立てた。

「ぼくの名前は、バーニーっていうんだよ」

そいつだか、そのあやしい物だかは、「スティッグ」と言っているような声を出した。

「からまった足をほどももらえるかしら、スティッグさん？」と、バーニーはていねいに言った。「ポケット・ナイフがあるから」——おじさんの仕事場の床に、かんなくずにまじって落ちていたのをひろって来たナイフが、ポケットにはいつているのを思い出したのだ。刃が一枚なくなっていたし、もう一枚の刃も半分のところで折れていて、かなり切れ味も悪かったが、とてもいいナイフだった。

「ポケットに入れておいてよかったな」と、バーニーは思った。さんざんもがいてナイフを取り出し、やっとのことで、錆びた半分だけの刃を開いた。足にからまったツル草に手をのぼしたが、両足が頭より上でしばられていては、なまくらナイフでツル草を切るのはむずかしいことがわかった。

すみっこにすわっているあやしいやつは、どうやら興味を持ったようだった。立ち上がると、バーニーのいる明るいところへ動いて来た。それが人間だとわかって、バーニーはうれしかった。「でも、おかしな格好だかっこうな、ウサギの皮のパンツだけで、靴くつも靴下くつしたもはいていないなんて」と、バーニーは思った。

「ふうーっ！ どうしても足までとどかないや。きみやってくれよ、スティッグ！」

